

全国短歌大会特選記念

短歌集

人工知能（A I）

金子公宥

（企画・編集 藤田英和）

謝辞

本短歌は歌人の鈴木きぬ子先生（岸和田市久米田公民館）並びにNHK短歌講座の先生方のご指導を得たもので、企画・編集はひとえに藤田英和氏（NPO法人みんなのスポーツ協会初代代表）の労によるものである。同協会本部からも間接的なご支援をいただいた。記して深謝の意を表します。

金子公宥

はじめに

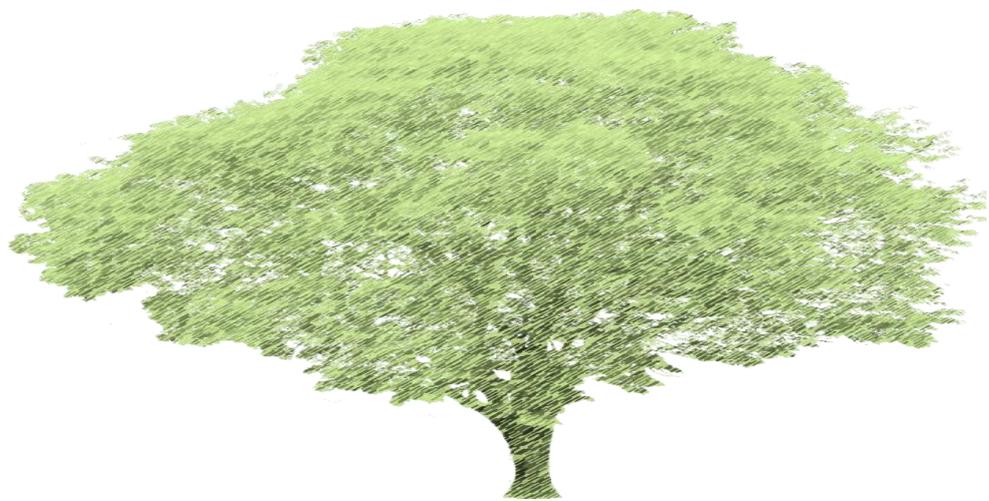
このたび私たちNPO法人の顧問・金子公宥氏が「子規顕彰全国短歌大会」で愛媛県知事賞、特選などを授賞されました。

そこで本法人ではこれを機に「ねこの昼寝」につづく第二歌集を「人口知能(AI)」と題し上梓することにしました。

今回の歌集には、「子規顕彰全国大会」での受賞作品に、「ねこの昼寝」以後の新たなNHK全国大会入選歌約20首と、「自選歌」を加えて上梓しました。
ご高覧頂けたら幸いです。

令和元年六月吉日

特定非営利活動法人 みんなのスポーツ協会



人口頭脳（A I）

目次

第一部 子規顕彰全国短歌大会

知事賞（特選）

A I がやがては 6

特選

戦友が父の最期を 6

入選

われわれは地球と 6

第二部 NHK（全国）短歌大会

秀作

滑落のテトラポッド 8

出征時「死んで還れと 8

「オバカサン」言われ 8

佳作

戦地より届きし 8

入選

自然詠（6首） 9

社会詠（4首） 10

人生詠（5首） 11

生活詠（4首） 12

第三部 自選短歌作品

再録（前回歌集の入選作）

.

43

14

第一部 子規顕彰全国短歌大会

愛媛県知事賞（特選）

AIがやがては人類亡ぼすと

予言して逝くホーキング博士

特選

戦友が父の最期さいごを知らせたる

手紙が母の遺品に残る

入選

われわれは地球とともに回ってる

時速にすれば千数百キロ

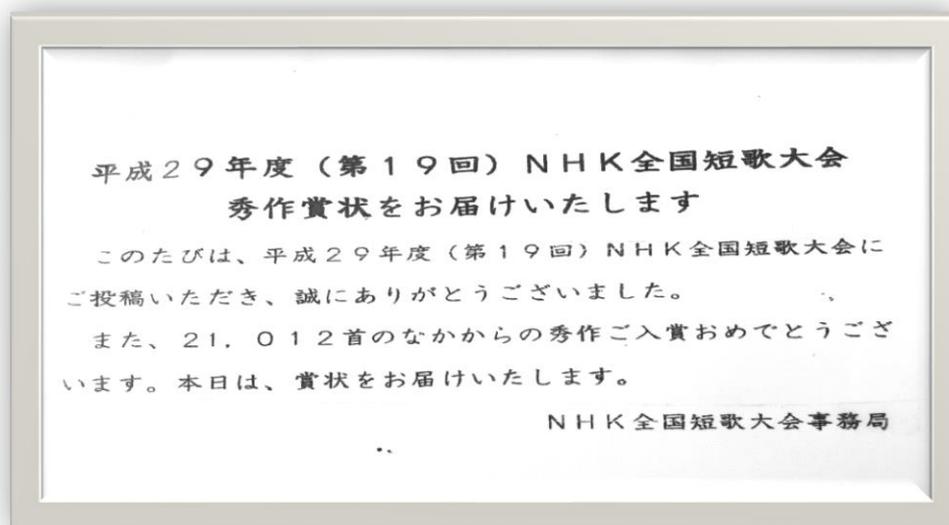
〔註記〕子規顕彰全国短歌大会では、愛媛県知事賞の上に文部大臣賞があり、左記の歌が受賞しました。

文部科学大臣賞（広島 今井洋子） 瀬戸内の島の夕ぐれ白線引いて一人の部活始まる



知事賞の賞状と盾の授与（左：竹田美喜・子規記念博物館長）
（子規生誕 150 周年で新装成ったばかりの松山市「子規記念博物館」にて）

第二部 NHK(全国)短歌大会(平成29年9月～平成30年11月)



秀作

滑落かたらくのテトラポッドを這い上がる

三メートルをミミズのように

(平成29年10月・NHK本部主催)

出征時「死んで還れ」と励まされ

戦地に散りし父の思いよ

(平成30年3月・本部)

「オバカサン」言われてる子の愛らしさ

頬ほほに飯めしつぶ二つもつけて

(平成30年9月・市川市)

佳作

戦地より届きし父の手紙には

軍靴かじる日々記されており

(平成29年10月・本部)



CC BY

(註) 短歌は「一首を続けて書く」のが常道であるが、読み易くするため、本歌集では敢えて一首二行とした。

入選（自然詠）

垣根より道に顔出す百合の花

手を添え愛でれば恥ずかしげに揺れ

（平成30年7月・郡上市）

枯れ落ちた松葉拾えばどれもこれも

二本が今も連れ添うており

（平成30年6月・伊香保）

香水の名前で知ったミモザの木

黄花どっさりわれを見下ろす

（平成30年7月・郡上市）

晴れた日の人無き浜の白砂に

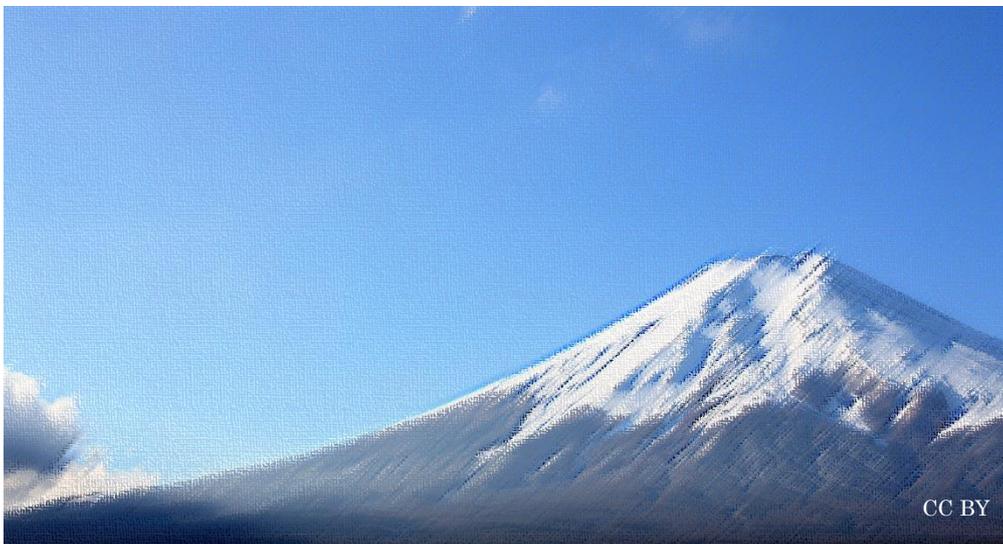
枯れ木で描く郷里の富士

（平成30年7月・郡上市）

道端に藪蚊の群れがうず巻いて

行く手をはばむ夕べの散歩

（平成30年11月・本部）



CC BY

入選（社会詠）

戦国の敵味方なく祀りたる

金剛峰寺をわれは訪うたり

（平成30年9月・市川市）

戦死せる父の墓前にひと山の

銀シヤリ捧げ平和を祈る

（平成29年10月・本部）

まなぶたを閉じれば浮かぶ原節子

大きな瞳にゆらめくひかり

（平成30年9月・市川市）

楽しげに無邪気に遊ぶ子供らよ

日本の借金背負わせてゴメン

（平成30年9月・市川市）



入選（人生詠）

さまざまな時を紡いで五十年

妻の小言も賑わいのうち

（平成29年9月・市川市）

妻の目を盗んで飲む酒うまい酒

夜中にこっそり楽しむひとり

（平成30年9月・横浜市）

五十肩痛みに耐えて夜明け待つ

時計の針の動きの遅きよ

（平成30年6月・伊香保）

真夜中の間違い電話は聞き馴れた

友の声なれ受話器を戻す

（平成30年9月・本部）

あと何年生きられるのか分からぬが

今はとにかくお腹なかが空いた

（平成30年9月・本部）



CC BY

入選（生活詠）

誰にでも吠えかかりたる番犬が

暑さに負けたか顎出し眠る

（平成30年9月・本部）

堂々と土俵入りする白鵬の

足腰の動き自信に満ちて

（平成30年3月・本部）

足許に落ちた薬くすりのカプセルよ

何処に消えたか煙のように

（平成30年3月・本部）

パーティーの幹事をすれば必ずや

足を出すわが金銭感覚

（平成30年3月・本部）



CC BY-NC-ND

第三部 自選短歌作品

目次

| | |
|--------|----|
| ことはじめ | 14 |
| さらば平成 | 15 |
| 人工知能 | 15 |
| 散歩道 | 17 |
| 夜の闇 | 18 |
| 二色の浜 | 19 |
| 夏はきぬ | 20 |
| 詩歌ごころ | 22 |
| ネコジャラシ | 23 |
| 近隣風景 | 24 |
| 終の住処 | 26 |
| 映像 | 27 |
| 天下り | 28 |
| 若き日々 | 29 |

| | |
|--------|----|
| 老い | 30 |
| 体調 | 32 |
| 宴会 | 33 |
| 友だち | 34 |
| 自然と偶然 | 35 |
| 神がかり | 37 |
| アメリカ大陸 | 38 |
| 世界は広い | 39 |
| スポーツ | 40 |

ことはじめ

歌を詠む粹な友の勧めにて

短歌始めし七十六歳

元気が自慢と言ひし友逝けり

翅震わしてヒグラシの鳴く

言い難きことはいろいろ多けれど

短歌にすれば言える不思議さ

理科系で縁なき道と思ひし

短歌はじめて四年が過ぎる

ジム通い短歌はじめて四年経つ

八十路となりし三月四日



さらば平成

惜しまれて平成の世は去り行かん

我が五十年は昭和に残る

遠からずこの世にオサラバするわれの

極楽浄土は何処にありや

誰にでも他人に言えない事がある

永久に開かないタイムカプセル

枯れるほど頭を上げる稲穂にも

逆説ながら意味があるかも

人口知能

今日もまた人工知能のパソコンに

多くを尋ね一日を終える



囲碁・将棋ロボット知能に敵わずも

せめて短歌に近寄らないで

AIがやがては人智を超越し

われらに指示をするかも知れぬ

エアコンを掃除したあとテストする

吹き出す冷気にくしゃみ一発

物言いのついた相撲の判定を

ビデオがあばくわずかな時間差

パソコンは手慣れたところに型変る

この腹立たしさを如何に鎮めん

スマホ打つ幼おちのなの小指がピンと伸び

人差し指が画面をつつく



散歩道

日の当たるベンチに腰かけ雑草ひけば

はやばや春の匂いがするなり

田の間を流れる川の草むらに

誰が捨てたか子亀一匹

拾いたる櫓のドングリ二つ三つ

磨きつつゆく朝の公園

秋深し燃えるがごとき紅葉を

ゴッホならばいかに描かん

ひとつだけ取らずに置かれし柿の実の

黒々と見ゆ冬の夕空

尾がとれて四足となりしカエルの子

よたりによたりと水辺を歩く



CC BY

松ばやし枯葉は多く積もれども

散る光景は見た記憶なし

夜の闇

秋の夜に灯下を過ぎるわが影が

ぐんぐん伸びて闇に消えゆく

夜道ゆくわが車を避けて電柱に

隠れる老爺にお詫びのブザー

寝かれず夜半に窓開け外見れば

篠つく雨が降りつづきおり



二色の浜

茅渟ちぬの海ゆつくり沈む太陽が

煌めく海面うなも飲み込んでゆく

底深きテトラポッドを滑落す

気が付けば我はまだ生きてる

関空と神戸港のぞむ二色ヶ浜

パノラナ展ひろぐ海辺を歩く

蒼天に点となりたるジェット機の

飛行機雲が和泉嶺いずみねを越ゆ

晴れわたる海原遠く水平線に

船のてっぺん貨物船らし



CC BY

くり返し寄せくる波に洗われて

テトラポッドの天辺てっぺんひかる

関空をいま飛び発ちしジェット機が

青き大空切り裂いて行く

夏は来ぬ

夕焼けが茜散らして拡がりぬ

そよ風涼しき海辺を行けば

ポウフラの浮き沈みをばよく見れば

沈んでは浮き浮きては休みぬ

パンジーのあとに咲きたるマツバボタン

五色の花がみんないい顔



山茶花さざんかの茂りし庭の隙間から

そっと顔出す朝顔の花

背伸びして垣根をこえしハイビスカス

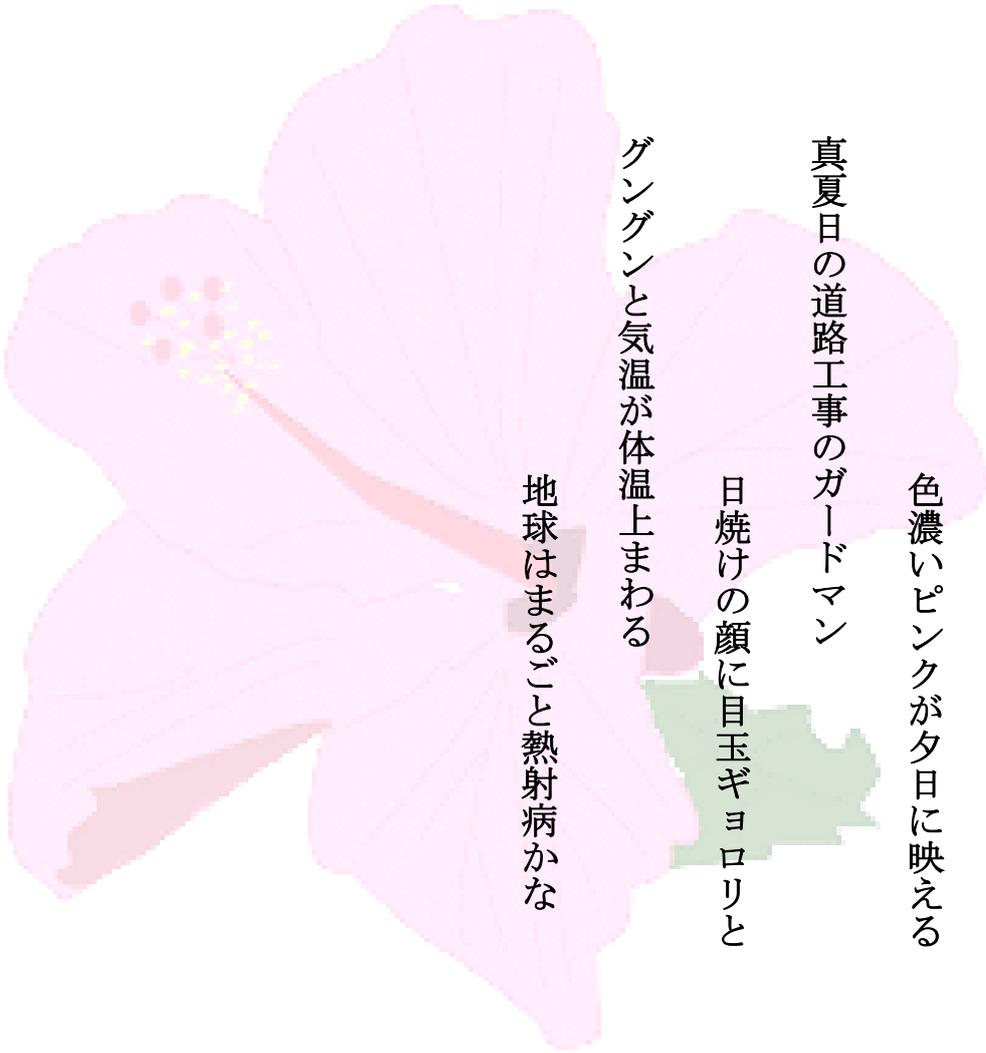
色濃いピンクが夕日に映える

真夏日の道路工事のガードマン

日焼けの顔に目玉ギョロリと

グングンと気温が体温上まわる

地球はまるごと熱射病かな



ハイビスカスは、一日だけ咲いてその日のうちに枯れてしまう一日花。

花言葉は「新しい恋」「常に新しい美」

詩歌^{うた}どころ

松山の街を歩けばそこここに

子規の生きたる証^{あかし}が残る

布団からはみでた足の冷たさが

我に教える冬の訪れ

箱根にて苔むす宿に落ち着けば

笥^{かげい}の音が小気味よくひびく

道端のカラスノエンドウ^{まや}鞘黒く

種をはじきて反り返りたり



「烏野豌豆」は実がカラスのように黒いことからカラスノエンドウと言われている。花言葉は「小さな恋人たち」「喜びの訪れ」「未来の幸せ」

ネコジヤラシ

ヒグラシの鳴く声透る二色の浜

カモメが一羽水面を滑る

猛くして空地に広がるネコジヤラシ

月の光に白くかがやく

厳寒の淋しき風情の公園に

赤く群れ咲くサザンカの花

寒風に負けずに咲いた寒椿

さびしき庭にいろどり添える

香水の名前で知りしミモザの木

黄花どっさりわれを見下ろす



ネコジヤラシは、別名エノコログサ（狗尾草）と呼ばれており、花穂を振ると猫がじゃれつくことから名づけられたようです。花言葉「愛嬌」「遊び」



近隣風景

石垣のノゲシの綿毛が舞い始む

ゆらゆらゆらと何処へゆくのか

桜散り古木の幹にはりつきて

名残りを惜しむ花びらひとつ

小春日の昼の日照りはどこえやら

沈む夕日に冷たい風吹く

春来ればカラスノエンドウふくらみて

草笛つくり子どもにかえる

咲く時期が桃に遅れし桜花

いまわがときと枝にあふれる

カルガモの去りし城濠にぎわすは

大きく育ちしひらひら緋鯉まていに真鯉まてい



脳みそも溶けだしそうな猛暑日に

復興手伝うボランティアあり

夏の日^に鳴き続けたるアブラゼミ

腹を上にしベランダにまろ転ぶ

花の宴紙コップの酒がじわじわと

五臓六腑を温めてゆく

古木なる桜の割れ目に集う蟻

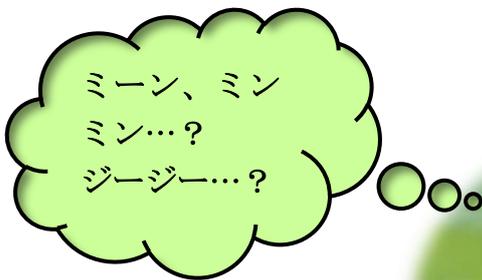
忙せわしく動く今日も真夏日

家近く藪蚊やぶかの群れがトルネード

春の陽あびてはしやぎておりぬ

白雨はくう去り和泉嶺いずみねかくす雲晴れて

生駒いごの山が近づき見て見ゆ



終つひの住す処みか

味気ないマンション住まい慰める

シンピジウムの華やかな色あい

わが腕を刺したる蚊をば殺したり

マンション六階夕べの部屋に

妻の留守われエアコンを消し忘れ

外出すれば帰宅がこわい

仰あやう臥がしてソファーにとろり微まじろ睡るめば

秋めく風が極楽もたらず

風吹けばピューリピュララと聞こえる

窓すきまの隙間が笛となるらし

早朝にベッドの下を掃除する

自動掃除機わが家のペット



さまざまな時を紡いで五十年

妻の小言も賑にぎわいのうち

きつとまた妻は言うだろ食卓で

酒量減らせと退院し来れば

岸和田の昼・夕告げる音楽は

深き音色のパイプオルガン

映像

なまめかし淡路恵子の映像の

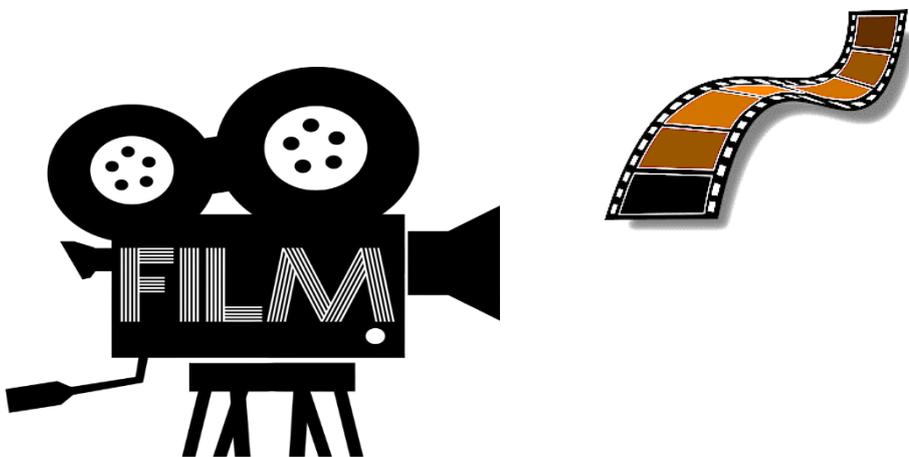
紫煙しえんくゆらす白い指先

公民館まつりに集う高齢者

女性の波に飲まれる我は

何故に舌を噛みそうな名をつけた

可愛い歌姫きやりーぱみゅぱみゅ



かん高いテレビの声に振り向けば

「徹子の部屋」のゲストはさんま

若づくり日本のマスコミ皮肉にも

戸籍の年齢をあげき出したり

天下り

高天原たかまがはらに始まりたるや天下り

神代かみよの伝統いまに続けり

高校に入学するや新設の

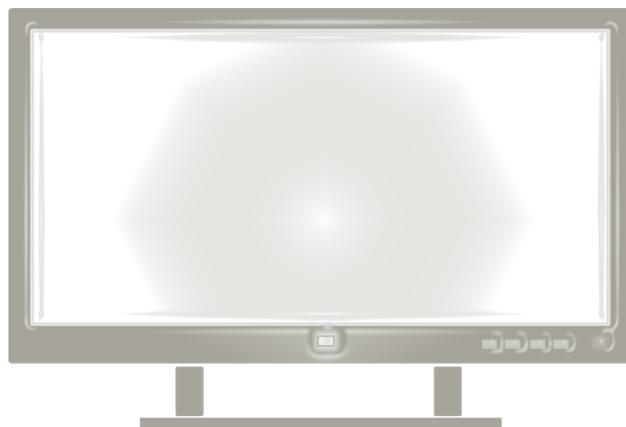
購買部では初代部長に

独力の東京生活覚悟して

柳行李やなぎこくりにすべてを詰めき

武蔵野の屋敷はどこも庭広く

庭園管理のバイトは尽きず



今の世に頭から腐る鯛のごと

森友・加計もりとも かけが異臭を放つ

若き日々

中卒の片親のわれに職はなく

書類審査で門前払い

横浜でこっそり船にもぐりこみ

アメリカ渡航を夢見し若き日

母の日の作文しばしば入選す

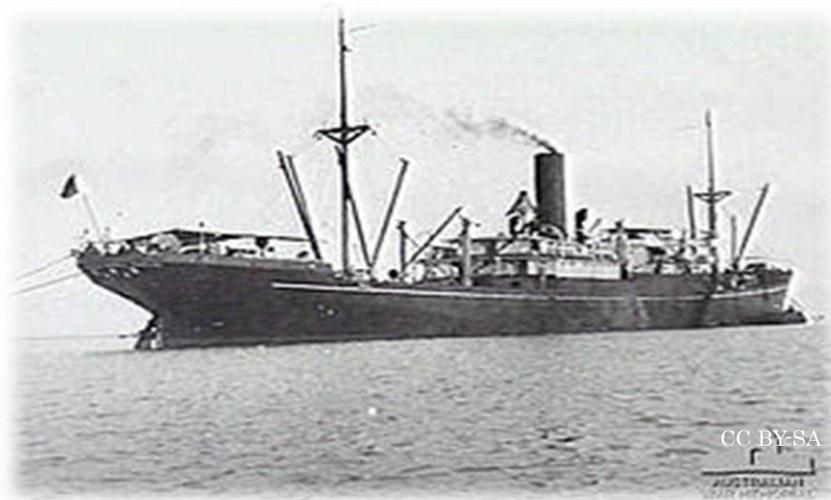
行商の母をそのまま書けば

空と海かけ回わりたる若き日は

今や昔の遠き想い出

淡き思いをかけし恋人ひと

孫の自慢す同窓会で



学生の私語にヒントを得た研究

発想素朴で結果は有用

研究は意外な結果が貴重なり

平凡なるほどその意味深し

同窓に会えば過ぎたる壮年の

熱き血潮がよみがえりたり

老い

朝起きて顔を洗いてくすり飲む

老いのルーティン思うこのごろ

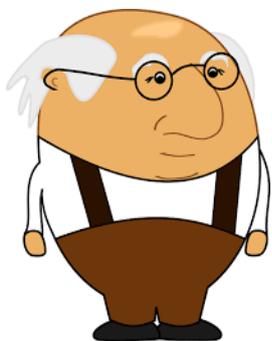
すでにもう賞味期限の過ぎしもの

定年過ぎしわが身と重なる

雨多き六月の日々の湿り気に

吾いやされる年老いたれば





老いたるを自覚せねばと思いつつ

今日もころびしダンゴムシのこと

らくらくと跳べた堀さえ越えられず

遠回りする我は老人

八十路やそじにて下り坂のみ歩くなか

マサカの坂あり短歌の入選

小気味よい啖呵を切った『九十歳』

何がめでたい』と佐藤愛子氏

調子よく詠みはじめたる短歌ネタ

結句につまり頭から消ゆ

朝転ころぶいやな予感の一日を

無事に終わりにてほっとひと息

体調

四十路よそじにて心臓発作に襲よわれき

思えばこれが持病のはじまり

難聴のわれに慣れたる蝉しぐれ

夏が過ぎても居すわりており

心臓のバイパス手術を待ちし妻

生きて還れと祈りたるとか

肝臓あばのCT検査が暴あき出す

径一センチの白き島影

病床の末期の友は無言にて

ゴルフの話に微笑み浮かべ



ユウゼンギクは 6～11 月に柄のある蕾をつけ花を咲かせます。咲く花の姿を友禅染に見立て名付けられたようです。花言葉は「若者に負けぬ元気」「老いても元気で」元気に老いたいと思う。

宴会

喧噪けんそうのパーティちよいと抜け出して

トイレに入りホッと一息

焼きたてのサンマの腸わたの苦みにがこそ

何にもまして旨きものなり

懐かしいラムネの店を見つれたり

味わいて後じつとビン見る

ジム帰り薄雲かかる太陽が

目玉焼きに見ゆ空腹なれば

中国の五十余种なる水餃子すいぎょう子

円卓まわりて客をもてなす



ゴルフ後にひと風呂あびて飲むビール

老後の楽しさここに極まる

友だち

大地震「大丈夫か」と問いたれば

「頭真つしろ」と電話の向こう

教え子が送ってくれた酔橋すだちの実

箱をあければ放つ香よ

短歌会新メンバーが参加して

教室賑わう年度のはじめ

もう二度と逢うことのない友乗せて

霊柩車は行くしずしずと行く



とりどりの花に包まれ逝く友に

「さよなら」の声喉につまりて

俳句から短歌に移りし友の歌

短歌に珍し「あげひばり」なり

わが友は意識無くして入院中

なれど見舞いに笑ってくれし

自然と偶然

たんたんとききし女優の樹木希林

自然のままに自然にかえる

「歌よみに与ふ」という書を読みて

子規の怒りに恐れおののく

「ダメモトだ。恥を恐れず進みなさい」

わが師の教えいまも生きてる



「揚げ雲雀」は、空高く舞い上がってさえずっているヒバリこのことで、俳句の春の季語として使われている。

台風を早期に見つけ向き変える

それが出来たらノーベル賞だ

日溜りで昼寝していし三毛猫が

大きく欠伸あくびす新春はるのはじめに

団栗どんぐりがポコンと頭に当たりたり

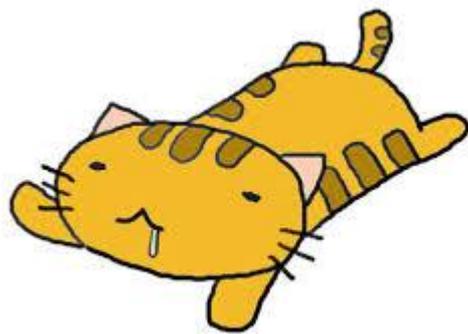
滅多にないこと今日は良い日だ

何事もそれを仕事にするならば

楽しくも有り楽しくもなし

古里の天城の山はわが誇り

豊富なワサビと浄蓮の滝



神がかり

憎まるるカラスなれどもヤタガラス

神を導き大和に至る

月の夜に吠える野犬の声高し

むかしの野性に目覚めるときか

店名をパンドラとう遊技場

ジャラジャラポンと悪とびだすか

春雨にかすむ淡路の山並みが

われを誘い幽玄に入る

このマグロ何処の海を泳ぎしか

哀れ今宵のわが食卓に



アメリカ大陸

米国の友より桜の便りあり

思えば桜は平和の使者

米国で共に研究しし友が

宇宙飛行士に合格したり

学友のマスグレイブは六回の

宇宙飛行終え今フロリダに

初めての留学先はケンタッキー

五十年もの歳月過ぎぬ

真夏日の砂漠の中を五時間余

ベガスに向けてひた走りしよ

銃事件アメリカ社会に頻発す

ジョン・ウエインの映画のままに



ナイアガラ瀑布の水量すさまじく

どっと落ちゆきわが魂うぼう

世界は広い

柵の外動物たちが人間を

興味深く見ているサファリ

秋来ればミラノに集うジプシーの

物乞い避けて車道を歩く

掛け軸の楊貴妃ようきひの顔ふくよかなり

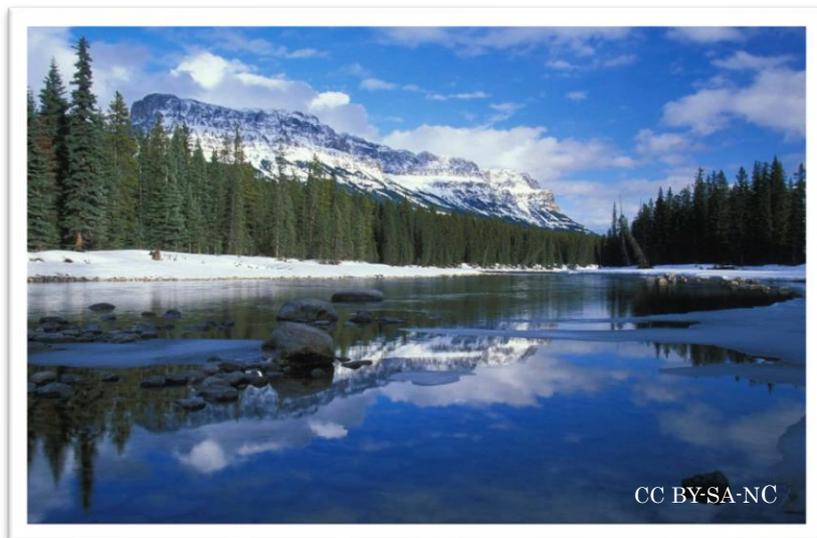
平安時代の女御にようごのように

楊貴妃の住みたる華清池かせいち散策す

四方八方花に囲まれ

毎日が真つ暗闇の半年に

白昼はくちゅうつづくフィンランドは



北欧は四月となれば暖かな

春の日が差す樂園の日々

ベルリンの壁の跡には桜だと

募金つのもりし友の夢叶う

テルアビブ別れの時に青年は

「日本はいいね戦争なくて」と

スポーツ

ボクサーの放つパンチの鋭さよ

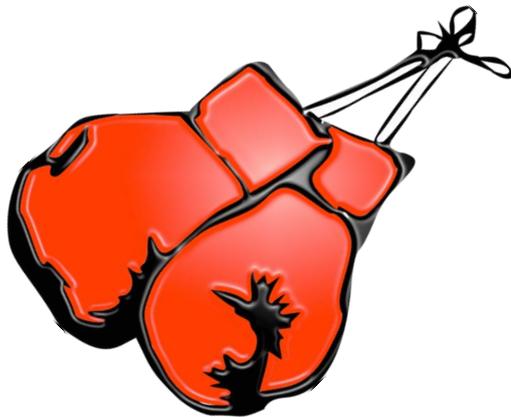
狙うは互いの鼻のてっぺん

力まずに力を入れて走るのが

素早く走るコツであるらし

わが友は片脚バネで銀メダル

努力みのりしパラリンピック



東京を走るマラソンランナーの

黄色いシューズがきらきら弾む

球児たち炎天下にも笑顔なり

ムードづくりの秘策なるかも

アメリカの野球ファンの度肝抜く

大谷選手の二刀流の冴え

モンゴルの国技のような大相撲

ガンバレ日本の関取たちよ

ゴルフ界松山プロが牽引す

放つショットの位置の確かさ





人生は楽しく愉快でありたいと

還暦すぎし友は語りき

「人生はいつも楽しくありたい。真剣に遊び心を持って楽しめば、そこには自ずと笑いが生まれ、人と人とのつながりと心と心のふれあいが生まれる。」とは藤田英和氏の口ぐせの言葉である。



再 録

前回歌集で収録済のNHK全国大会入選・佳作（21首）

〈再録〉 前回歌集の入選作

NHK全国大会入選・佳作（平成27年～平成29年7月）

戦争がそろりそろりとやってくる

誰もがみんな気づかぬうちに

平成27年6月全国大会（伊香保）第一回投稿

（入選）

ひたひたと寄せ来る波を受け止める

テトラポッドの音小気味良い

平成27年6月全国大会（春季）

（入選）

堀端の藪蚊の群れをくぐり抜け

項うなじに残りし一匹を叩く

平成27年7月全国大会（那智勝浦）

（入選）

自販機の大きな音に振り向けば

汗ふく若衆ニツカボツカで

平成27年7月全国大会（那智勝浦）

（佳作）



行商の荷を負い母は働きぬ

戦地に散りし父に代わりて

平成27年10月全国大会（秋季誌上）

（佳作）

近隣の幼稚園より湧き上がる

歓声今日も老を励ます

平成27年10月全国大会（秋季誌上）

（入選）

たった今エレベーターを降りし女性

ミモザの香残して去りぬ

平成27年10月全国大会（秋季誌上）

（佳作）

自転車の母の背を抱く幼子の

くりくり眼秋の風ふく

平成28年9月全国大会（春季誌上）

（佳作）

人類は争い好む生物か

戦争たえぬ世界のどこかで

平成28年9月全国大会（春季誌上）

（入選）



鮮やかな色合いが特徴的で女性に人気を集めるミモザです。

花言葉は、全体では「友情」「優雅」「秘密の愛」「真実の愛」「秘かな愛」「豊かな感受性」「堅実」「エレガンス」「神秘」など…

もがきつつ釣り上げられしワカサギが

氷を枕に転びておりぬ

平成28年9月全国大会（和倉温泉）

（入選）

天空に光かがやく日暈こそ

「日輪」の名にふさわしきかな

平成28年9月全国大会（和倉温泉）

（入選）

夜遅く灯をつけて壁を塗る

左官の鏝がキラリと光る

平成28年9月全国大会（和倉温泉）

（入選）

近頃は珍しくなりし浴衣の娘

カタコトカタタンと足音涼し

平成28年12月全国大会（コンクール）

（入選）

寝つかれぬわが顔かすめ一匹の

蚊が音高く過ぎてゆきたり

平成29年8月1月21日全国大会（本部）

（入選）



日溜りにネコがのんびり昼寝する

師走正月どこ吹く風と

平成29年1月21日全国大会（本部）

電線に群れなしとまる雀たち

見つめる方向なぜかバラバラ

平成29年3月全国大会（誌上大会）

神仏の宗派を越えしクリスマス

大和の国は平和なるかな

平成29年3月全国大会（誌上大会）

ゆりかもめ急降下して魚とる

銚もりをグサリと突き刺すように

平成29年5月全国大会（伊香保）

手術待つ白内障のわが目には

かすみで見ゆる寒椿の花

平成29年5月全国大会（伊香保）

（入選）

（佳作）

（入選）

（入選）

（入選）



寒椿は、寒さの厳しい日陰であつても花を咲かせます。花言葉の「謙譲」「愛嬌」「申し分のない美しさ」は、そんなイメージから付けられたそうです。

この魚どっこを泳いでいたんだろう

お節せちの中のゴマメと目が合う

平成29年5月全国大会（伊香保）

（佳作）

夕暮れに独りで遊ぶ幼子の

ブランコの音幽かそけく聞こゆ

平成29年7月全国大会（田辺・熊野）

（入選）



おわりに

本歌集では、前回の歌集「ねこの昼寝」と同様に、口語の多い「わかりやすい短歌」を心がけ、漢字には多くルビ（かな）をふった。前回の歌集に友人たちから「短歌がこんなに親しみやすいものとは知らなかった」という反応が寄せられた。親しみやすさのもう一つの大きな原因が、藤田英和氏の素晴らしい企画・編集にあったことは言うまでもない。今回の歌集も同氏の勧めと企画・編集によったものである。

実は前回の歌集をお二人の歌人にも送った。するとお二人から異口同音に「貴方の短歌は、短歌を知らない一般の人にも分かれるところに特徴がある」とのコメントを頂いた。実は「わかりやすい短歌」とするに当たっては、私の心中に歌人・小高氏の次の趣旨の意見があった。

新聞・雑誌・小説は誰もが読むが、短歌は短歌を詠む人だけが読むものと考えられてきたため、一般の人々の間に広まらず、玄人と素人の差もハッキリしない。これが近代文学としての短歌の評価を複雑なものにしてきた。

（小高賢：「老いの歌」、岩波新書）

短歌は今や大きな曲り角を迎え（俳句も同様らしい）、口語を存分に用いる時代を迎えている。本歌集では、歌数を前回と同様に約200首（一般の歌集の約半文）に絞った。「願わくば最後まで読んで頂きたい」との願いからで、気楽にご高覧・ご笑覧頂けたら幸いである。

短歌詠人：金子公有（かねこまさひろ）

昭和13年3月4日生、静岡県伊豆の国市（韮山）出身

大阪体育大学名誉教授、教育学博士（東京大学）

日本バイオメカニクス学会会長

国際体力研究学会(ICPFR)副会長 ほか

「発想スポーツ科学への招待」（杏林書院）ほか

〒597-0021 大阪府貝塚市小瀬 527-2-602

Tel:072-433-2311 E-mail: mkaneko@rinku.zaq.ne.jp

企画・編集：藤田英和（ふじたひでかず）

昭和25年9月22日生、大阪府出身

NPO法人 みんなのスポーツ協会初代代表

連絡先：wqmw18757@leto.eonet.ne.jp（藤田英和）

（註）個人画像以外は作者不明のクリエイティブ・コモンズ・ライセンス（CC BY など：画像右下記載）のもとに掲載を許諾されています。（表紙は CC BY-SA）また、その他の画像は非営利目的での再使用が許可されたものです。